

☆（現場へ！）医療的ケア児が学ぶ：1 みんなの学校に通いたくて

朝日新聞デジタル 2021年10月4日

https://digital.asahi.com/articles/DA3S15065463.html?iref=pc_ss_date_article

> 小学校への集団登校の列に、車いすに乗った医療的ケア児が加わっている。相模原市中央区の佐野涼将（すずまさ）さん（8）。父の政幸さん（44）と母の綾乃さん（43）が車いすを押し、子どもたちに声をかけられながら、学校へと向かう。

列が同区の市立小学校に着くと、同級生らは涼将さんの手をかわりばんこにタッチして鬼ごっこ。車いすを押しすることもある。だが、そんな姿は昇降口まで。涼将さんは校舎に入らず、同級生らを見送る日々。在校生ではないからだ。こんな交流が1年以上続く。

涼将さんは、妊娠中の母体トラブルで脳にダメージが残ったとされる。人工呼吸器をつけ、栄養摂取は胃へのチューブで行う「胃ろう」。定期的なたん吸引も必要だ。意思表示で手の指の一部が動くが、発語はない。周囲は感情を読み取りにくいはずだが、両親はそれがわかるという。

同じ神奈川県内の県立の特別支援学校に在籍するが、市立小への転校を目指すため登校していない。将来の自立生活に向け、周囲への意思や感情伝達をどうするかと考え、両親が「地域の子どもたちと同じように育てたい」と考えるからだ。「自分たちの思いだけではない。涼将も同級生たちとの交流でテンションが上がっている」

市教育委員会は涼将さんが就学前の2018年度、特別支援学校へ入学後に市立小に転校することを見据えた計画を検討。それに向けて、涼将さんは19年度、毎日ではないが小学校へ出向き、運動会や遠足などの行事に参加して1年生の同級生と交流した。市教委は特別支援学校との「共同学習」になるよう、医療的ケアの実施や個別の指導計画、特別支援学校による小学校への助言などを盛り込んだ年間の計画表を作り、2年生からの転校へ準備を進めた。

だが、涼将さんを担当し、支援知識が身についた教員が病休。支援態勢が整わなくなった。市教委は「普通級での受け入れ経験がなく、彼の学びに最適なのは特別支援学校」として転校を認めなかった。両親は納得せず、以後話し合いが続いている。

「多様性を認め合う子どもの成長の場は、地域の小学校の通常クラスのはず。なぜ、こんなことに」。政幸さんは8月の支援者らによる集会でこう訴えた。一方で、会場からは「進学先に特別支援学校を選ぶ選択肢も間違いではない」との意見も出た。

本村賢太郎市長は8月の定例会見で、「（涼将さんが）学校に通えていないのを一日も早く解決したい。考え方が一致出来なかったことについては責任を感じる」と述べた。鈴木英之・市教育長は「特別支援学級では高度な医療的ケアを熟知した看護師の配置が不可欠。普通級だと個別の教員配置は難しい」と悩む。10月中にも、看護師や教員の人員配置などについて市教委の考え方を示したうえで、両親と協議を続けるという。

川崎市では18年、難病で人工呼吸器を装着している男児とその両親が、神奈川県と市を相手に、地元市立小への就学を求める訴訟を横浜地裁に起こした。地裁は昨年3月、請求を棄却。控訴審の東京高裁で審理が続いている。男児と両親は東京都世田谷区に転居し、区立小への就学が認められた。

…などと伝えています。



同級生らの集団登校の列に英之教育長加わる佐野涼将さんと両親
= 9月、相模原市中央区



小学校の遠足に参加する涼将さん
= 政幸さん提供



支援者らによる集会に参加する佐野さん一家
= 8月、横浜市中区



相模原市教育委員会の鈴木